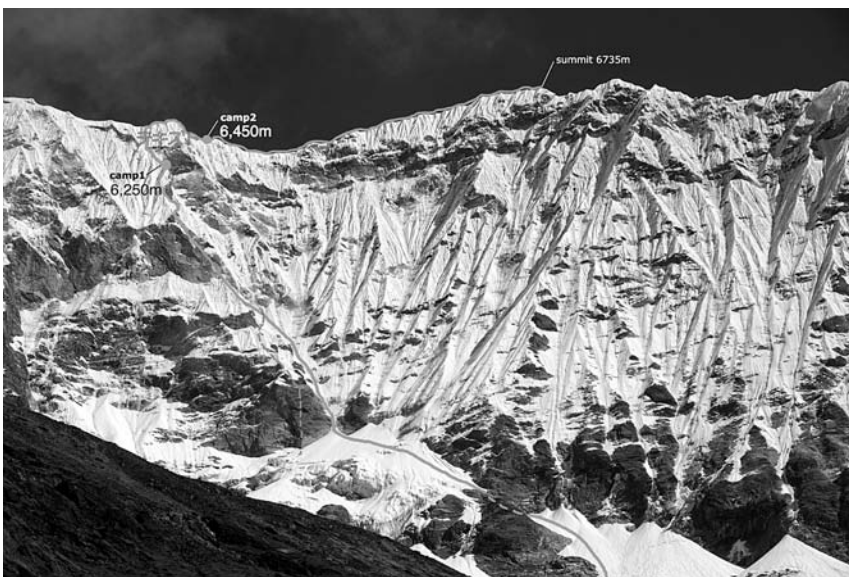


## カン・ナチュゴ南壁

山本大貴（関西学院大学山岳会）

2016年秋、鳴海玄希と私は、ネパール・ロールワリン山群、カン・ナチュゴ峰への遠征を行い、通算第2登、南壁としても第2登に成功した。当初の計画では、未踏の標高差約2,000mのより傾斜の強い東壁の初登攀を狙っていた。

しかし、東壁は太陽が壁を照らし始めると同時に上部から落雪、落石が相次ぎ、登攀の可能性があった下部岩壁についた氷や雪の筋もリスクが高いため諦めざるを得なかった。目標を南壁へ修正後も、私たちが初めて目にした9月末からすごい早さで、壁自体がドライになってきている。2008年にアメリカ隊が試みた頂上へダイレクトに突き上げるラインを予定したが、可能性のあった標高約6400m付近のロックバンドにかかる氷柱が細く、日に日に崩れ掛かっていた。そこで、壁の弱点でもあったロックバンドの端のリッジから稜線へ抜け、頂上まで稜線を辿ることにした。



カン・ナチュゴ南壁

### (1) カン・ナチュゴへの経緯

「今年ネパールに行かない？」

2016年3月、新穂高から滝谷へと向かう途中、偶然にも別パーティーとして山スキーで入山していた鳴海玄希に声を掛けられた。当時、今年こそはどこかへ遠征に行こうと考えていた私は、その場では少し考えると返事しながらも、心の中ではその誘いに必ず乗ろうとアプローチ途中に決めていた。私自身、結婚、子ども、家族の病気と家を抜け出しにくい事情もあり、なかなか遠征を実現できないでいた中での話であった。

カン・ナチュゴは、ロールワリン山群、チベットとネパールの国境稜線上に位置する。ロールワリン谷最上流の村「Na（ナ）」の北東約3.3kmにそびえる、比較的アプローチが容易な山である。ベースとしたナ村のロッジからは、東からカン・ナチュゴ、バモンゴ、チェキゴの連なった山々の南壁は一望で

き、南壁のベースとしては最適であった。初登頂は2008年に西稜からピークへ辿ったアメリカ隊が行い、また同年スペイン隊が南壁の初登攀し、東峰（6,640m）に至っている。

元々、2015年にカンテガ北壁をトライした、馬目・鳴海・青木トリオが予定していた山であった。計画書まで存在したこの遠征が、4月に発生したネパール大地震の影響を考慮し、カンテガ北壁へ変更になったため、トライされなかった壁である。

冒頭でも記載したが、当初の計画は南壁ではなく、東壁であった。手元にあった東壁の解像度の低い写真は、2枚。ロールワリンのトレッキング街道から撮られた写真である。予定ラインとして引かれた赤い線も、非常におおまかなラインだったことがわかる。写真では上部は綺麗な三角の山にも、壁の基部に立ってみると南北に幅の広い台形型のどっしりとした構えであった。



東壁 東南方面からの遠望



東壁 基部から見上げる

## (2) ルートの選択

当初目論んでいたルートからは二転三転し、登攀ルートが定まった。最も壁の弱点とも言える、上部ロックバンドを避けたライン取りになっている。今回は、2008年のアメリカ隊、スペイン隊が登っている情報に多いに助けられた。アメリカ隊は唯一の登

頂しており、ルートはカン・ナチュゴ峰から大きく外れた場所から西稜に達し、私たちがトレースしたリッジを辿り登頂している。またスペイン隊は、主峰から東南約100mあたりに位置する東峰に南壁をダイレクトに抜けるラインで登攀している。東峰には達したものの、主峰には至っていない。そうしたことから、西稜は歩けること、主峰から東側の稜線は困難なことが予想され、主峰に至る鍵は西稜にあることがわかっていた。

最終的にどのルートに登るのか、それはday1のまさに日の出とともに、といった感じで決めた。BCであるロッジからも登攀したルートは眺望でき、西稜までは繋がっているかもしれないと期待していたラインの一つであった。ABCでの話し合いの結果、当初は南壁を登攀できる可能性が最も高いライン（スペイン隊が東峰に至ったライン）に登ろうかとアプローチ中は考えていただけに、取付手前での鳴海からのルート変更の提案に非常に驚いたのも事実であった。しかし、人が登ったラインではなく、新たな未踏のラインでトライできることに私としても非常に賛成で、すぐに同意した。

これらは、朝になり晴天のもと間近で見渡せるようになると、より詳細なコンディションを確認することが出来たための判断であった。このロールワリン谷は、2016年が特別だったのか、モンスーンが明けた後も毎日必ず雲が湧き起こり、山が隠れてしまう。日の出頃は快晴でも、9時頃から雲が出始め、10時過ぎには完全に山は雲に覆われてしまう。そのため、壁の偵察にBCから上がった日も、ABC入りした日も、壁は雲に覆われ近くでルートを眺める機会を得ることが出来ないうでいた。後に判明することだが、この雲は標高約5,400から5,800mあたりのみ存在していた。その証拠に、day1もday2もその標高以上では、風は強いが快晴であった。

### 3. 海外登山記録

#### (3) 登攀

南壁の取り付け手前に小さな湖が出来るほど傾斜の落ちた場所があり、ここにABC（標高4,975m付近）を設けた。BC4,100mから4時間ほどの場所である。南壁は主に冰雪壁で、最も傾斜の強いところは標高6,400m付近のロックバンド帯となり、短いながらも傾斜は90度近かった。

標高5,100m地点に傾斜70°～80°の氷が現れ、ここからロープを繋いでの登攀が始まる。下から見る限りあまり良質とは言えない氷に見え、途切れているのではないかと心配していたが、予想に反して登れる氷だった。ここまでは優しいため、傾斜の緩い雪面をノーロープで各自登った。

今回の登攀では、壁の中ではほぼ同時登攀で進出した。60mのダブルロープを2本使用し、手持ちのギアがつきるまで登り続ける。少し困難な、セカンドが落ちる危険性のある箇所では、その上部にプーリー付ロープクランプ（今回はロールンロックを使用）をロープに噛ませ、セカンドが万が一墜落した時でも、トップが引きずられないシステムで行った。これは、今回のような比較的技術的に容易な冰雪壁系の壁では非常に有効で、ギアの受け渡しやセカンドのビレイする時間がなくなるため、ロープを上へ伸ばすことに最大限時間を割くことが出来た。このシステムは今後一般的となり、国内の登攀でも冰雪壁に限らず場所を選べば、有効に活用できると思われる。

最初の傾斜の強い氷の後も60°～70°の氷が標高にして約400m続き、単調なアイスであったが呼吸が乱れふくらはぎがパンプしてくる。標高が上がるにつれ所々岩からプロテクションが取れるようになってきた。標高6000mあたりから傾斜が増して行き、ロックバンドを左から回り込むための小リッジへ向かうと、傾斜の強いシュガースノーとなる。プロテクションが取りづらく標高を稼ぎにくいセクションを越え

ると、傾斜の落ちたリッジとなった。リッジの東側に回り込んだ箇所にテントを張りday1は終了。

day2は、リッジを少し進んだところに今回のルートの技術的な核心であった垂直に近いセクションを越えて、氷、シュガースノーを稜線までつめて行く。



核心ピッチを越える鳴海

標高6,450m付近にテントなどをデポし、山頂を往復する。かなり切り立ったナイフリッジのため、スタカットとコンテを交え3時間ほどで山頂に至った。しかし帰りは、頂上直下からチベット側のプラトーへ容易に降りられ、そのままノーロープでデポ地まで降りることが出来た。



頂上稜線



day3、快晴のもとビバークサイト付近より、主にアバラコフを使い、時には岩角、ピトン・チョックを残しながら、ほぼ直線的に17回の懸垂下降で登攀開始点まで下降した。日中には気温の上昇のため、day1には見られなかったスノーシャワーが頻繁に発生し、時折数十メートル横をサッカーボール大の岩が落ちて行った。ここで、ロープを外レトレースの消えた雪面を、視界を遮るガスの中、下降を続けABCで荷物を回収し、暗闇で迷いながらも19時過ぎBCのNa村に到着した。

今回の登攀に関しては、技術的には高いレベルを必要とせず、日本のメジャーな冬壁を登ることが出来れば技術的には十分であった。しかし、日本の整備された下降支点では身に付きづらい、下降の技術が非常に重要である。的確に安全な下降路を見いだし、スピーディーに設置する。今回はパートナーの鳴海にすべてを任せていたが、とても重要な必要不可欠な技術であると実感した。

#### (4) 雑感

##### (ア) 天候

文中でも記したが、私たちが今回滞在したロールワリン谷は、モンスーンが明けたにもかかわらず、毎日気温の上昇とともに雲がわき上がっていた。ベースからは山が見えなくなり、時折雨や雪を降らす雲であった。しかし、おおよそ標高5,400から5,800mのみに雲は対流し、それを越えるところでは、雲はなく快晴であった。この天候はカン・ナチュゴに限らず、同じくNa村をBCとしていたスペイン隊もチュキマゴをを目指した時に、同様の天候であったようだ。また同期間の他の登山隊からの情報も合わせると、2016の秋シーズンは例年以上に気温が高かったこともわかった。そのため、東壁での落雪・

落石が多発していたのかもしれない。

##### (イ) 物価の上昇

私が初めてネパールに訪れたのは2008年。当時、ルクラで雇用したポーターは600ルピー/人であった。今回のキャラバンはカトマンズ雇用のポーターであったが、以前の3倍、1,800ルピー/人となり、急激な物価の上昇が感じられる。またロールワリン谷でのキャラバンでは、輸送に基本ヤクやゾッキョは使用しないようだ。

##### (ウ) 装備

Na村では、ビスケット、チョコバーなどのお菓子からインスタントラーメンまで購入することが出来た。予備的な行動食などはここで調達することが、輸送コストや無駄を削減できる。またガスカートリッジも何本かはストックされており、おそらく購入も可能だろう。

ガスカートリッジは今回、カトマンズで購入したPRIMUS製（グレーに赤文字）を使用した。上部キャンプでは火力がとてつもなく低かった。順応過程での標高4~5,000m代では感じられなかったことから、気温によるものと推測できる。しかし、今回使用したガスは古いもので現在のモデルはデザインが変更されている。その中で、PRIMUS WINTER GASTM（ブラウンに白文字）は缶内面に特殊な不織布が張り合わせられ、寒い環境下でも液体ガスの気化が促進される機構となっている。バックキャラバン後のタメルで新しいデザインのPOWER GAS（レッドに白文字）を見かけたのでネパールでも新しいモデルは流通しているようだった。このPOWER GASについても、従来のガスカートリッジより、ガスの混合比率が異なるため低温化でも気化しやすくなっている。ここでは詳細な説明は省くが、今後高所に行く際は可能な限りこの新しいタイ

### 3. 海外登山記録

プのWINTER GASまたはPOWER GASの使用をお勧めする。

\* WINTER GASについて、ネパールでの流通は未確認。

#### (5) さいごに

本当に東壁は登れなかったのか。頂上に立ったという満足感が失われつつある最近、時折考えてしまう。下部は氷・雪のラインではなく、落雪・落石のリスクが低い、岩のパートから取付けなかったのか。偵察のため壁の基部にいたあの時は軽い口調で岩からも行けるのでは、など声に出していたが、ランナーが取れそうなクラックが少ないと思い、そもそも取り付きもせずに、諦めてしまった。これが自分の、自分たちの力量だと言いつけることは出来ても、もやもやしたものが残ってしまう。本当に登れないのか、と自問しつつ、まずは気持ちで負けないように、当面は国内でのクライミングに励んで行きたいと思う。

#### (6) 記録

Kang Nachugo 6,735m 第2登

南壁1300m 新ルート登攀

2016年10月16日～18日：3日間

メンバー：鳴海玄希(34)、山本大貴(30)

<行動概要>

9/22 日本出国

9/24 カトマンズ出発 キャラバン開始

9/28 BC4,180m (Na村) 入り

9/29～10/1 東壁偵察及びレスト

10/2～10/8 順応登山 (Parchamo 6,273m)

10/9～10/14 東壁・南壁偵察及びレスト

10/15 ABC (4,950m) 入り

10/16 登攀開始 南壁6,250m地点でビバーク

10/17 頂上稜線に抜け、6,450mビバーク地点より頂上往復

10/18 南壁を懸垂下降17回、ABCを撤収しBCまで戻る。

10/20～10/22 バックキャラバン

10/23～10/29 カトマンズ滞在 (飛行機待ち)

10/30 帰国

<登攀ギア> ロープ7.3mm\*60m/2本、X4#0.3/1個、ULキャメロット#0.4～#3/1set、ナッツ/1set、トライカム#1～#5/1set、ナイフブレード/4個、アングル/1個、レーザースピードライト13cm×3,17cm×3,21cm×2本、スノーバー/1本、スリング60cm/5本、120cm/2本、アルパインクイックドロウ/3set、クイックドロウ17cm/5本、捨て縄6mm\*20m、ローリングロック/2個、テント(クロスオーバードーム)/1張、リアクター/1個、シュラフ/2本、リッジレスト80cm/2枚、テルモス900ml/1本、ソフトフラスク250ml/1本、食料/2泊分+α